

図によれば各出生数とも満潮時前後に多く出生し、間潮時前後に少なく出生しており、上述の俗説を裏書きしているのごとくであるが、その差はごく少ないから、「生れるなら満潮時前後に」とまでは言いかねる。

なお潮汐あるいはその因たる太陽太陰引力の消長がいかにして出産と結びつくかということは筆者には不明であるが、かつて筆者が桜島噴火、日向灘諸地震の調査をした際、地震・噴火の日発生数は月令には無関係であるが、発生時刻は潮汐時とかなりの関係があったことと似ているのは興味が深い。

### 5. 月令別出生日の調査

上述10年間の月令別出生日は第4図に示すがごとくで、月令がいくらだから多く生れるというような日は見当らない。つまり朔望日前後に多く生れるというようなことはない。なおこの10年間の各月令日数は等しくはない。したがって第4図の数値は各月令日の出生合計数を各月令日数で除した数字であることを注意したい。

### 6. 気圧・気温の変化傾向別日出生数の調査

上述10年間の日出生数を気圧と気温の日平均値につき

それぞれ前後数日間のそれと照合して高極日・上昇中日・下降中日・低極日にかけての各出生数を求めたものが第1表と第2表である。

この場合は各日数が異なるのであるから、出生数そのままを比較するのは意味ないので、各分類日数をもってその日の出生数を除した10分率をとることとした。例えば集約のここ10年間の気温最高極日が50日その間に62人が出生しておれば統計値は $62 \div 50$ 、すなわち1.2である。

これによれば気圧、気温共各変化傾向の出生数は各初生児・次生児・男子・女子の各々を通じてほぼ一定である。気圧においては高極・低極日に、気温においては高極日に他の日よりやや多く出生していることになるが、その差はいずれもごく小さくて影響ありとは断言できない。すなわち気圧・気温の経日変化やこれに伴う晴曇雨天の別などは日出生数とか性別偏差に関係がなさそうである。一括して言えば「生れやすい日というものはない」と言えよう。一方死亡の方では気象的に「死亡し易い日というものがある」らしい。

## 理 事 会 便 り

### 第12回 常任理事会議事録

日 時 昭和38年6月10日 17.00~20.00

場 所 神田学生会館

出席者 松本、須田、今井、村上、増田、岸保、畠山、  
吉武、神山、淵 各理事  
磯野、孫野 各評議員（順序不同）

#### 決 議

1. 国際雲物理会議の準備委員会は差し次とのとおり構成する。  
委員長 畠山久尚  
委員 孫野長治（幹事）、今井一郎（幹事）  
磯野謙治、吉武素二、岸保勘三郎、  
須田 建
2. 第12期評議員として定員の残り3名を全理事の投票で決める。
3. 本年秋季大会の世話を気象研究所にお願いし、鯉沼寛一氏に大会委員長をお願いする。
4. 第11回太平洋学術会議の準備委員会委員のうち気象部門として次の諸氏を推せんする。  
和達清夫、畠山久尚、正野重方、荒川秀俊、  
山本義一、日下部文雄、吉武素二、今井一郎
5. 日本分析化学会会長から申込みの「大気汚染測定ならびに微量分析に関する討論会」の共催方の件了承する。  
なお、この討論会参加者募集に関し「天気」で紹介

介する。

また大気汚染の月例会との関連については神山理事があたる。

6. 全気象労働組合本庁支部から送られた原子力潜水艦寄港反対声明文についてはその主旨を「天気」にのせる。
7. 梅雨に関する論文が7編（別刷各50部）集まったので理事長の挨拶を付して近々発送する。
8. 次の者の入会を承認する。